

房総沖の巨大地震

大正十二年(一九二三)の関東大地震は、南関東の東部一帯に潰滅的な被害を与えました。この規模の地震が再び関東周辺で発生した場合、その被害は甚大をさわめるものと考えられ、未来の関東地震の予知とその対策に、多大の努力がはらわれていることは周知のとおりであります。

昭和四十九年九月、国の地震予知連絡会は、長年にわたる観測成果を公表しました。その結果、房総半島の南東沖一帯には著しい地震エネルギーの蓄積が認められ、近い将来、巨大地震発生の可能性があると警告しています。未来の房総沖地震の発生を予知し、その被害を最少限に止めるためにも、歴史学の分野でも多くの調査研究が積み上げられる必要があります。

房総沖を震源域とする巨大地震としては、慶長九年(一六〇五)・延宝五年(一六七七)・元禄十六年(一七〇三)の地震があげられます。いずれも相模トラフの線上付近で発生しており、特に元禄十六年の地震は、旧暦十一月二十三日の夜間に発

元禄の地震と大津波

(町文化財審議会委員)

郷土史研究家 伊藤一男さん寄稿

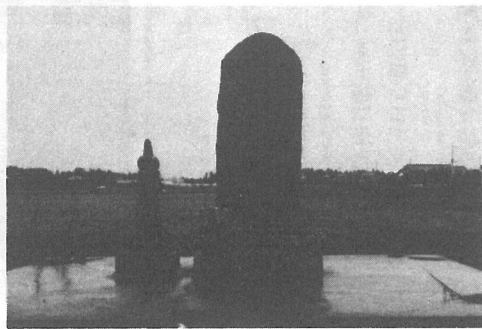
生、マグニチュード8.2の巨大地震で、江戸・小田原に大きな被害をもたらした。倒壊家屋二万戸、死者五千余人といわれます。また地震による津波は、特に九十九里海岸地帯、夷隅・長柄・山辺・武射の四郡を襲い、家畜を斃し、家屋を押し潰して、多数の溺死者が出たと伝えられます。

砂丘の村の津波塚

当時の犠牲者を供養して建てられた碑は、俗に「津波塚」と呼ばれ、九十九里浜の場合、成東町の木戸川を北限として、一宮川流域までの間に十八基の塚が認められます。ここに紹介する「百人塚」は、成東町の本須賀地区にある五輪塔で、その台座には「上総国

本須賀郷大水溺死精霊、元禄十六年十一月廿三日、導師藏音寺」と刻まれています。「百人塚由来記」によると、本須賀郷の津波による犠牲者は九六人と記され、やがて埋葬地には供養塔が建てられ、今に至るまで仏果菩提が弔われています。

また、茂原市の鷲山寺門前にある供養碑には、村々の死者一、一五四人と記され、南白亀川流域の被害の甚大さを伝えています。当時の村落状況は不明ですが、寛政五年(一七九三)の「上総国村高帳」を基礎に、総人口に占める犠牲者の割合を試算してみますと、平均で約三二%のほりです。中でも、現白子町の幸治村では七二%、古所村六〇%、中里村五九%で、まさに全村潰滅の惨状でした。



成東町本須賀の「百人塚」

日の子刻(午前〇〜二時)で、津波の襲来は丑刻(午前二〜四時)といわれます。津波の状況は「大山の如くなる潮、上総九十九里の浜に打ちかかる。海際より岡へ一里ばかり打ちかけ、潮流れゆくこと一里半ばかり」と記されています。

関東地震研の羽鳥徳太郎教授は、九十九里南部の津波を約六メートルと推定されていますが、この津波が南白亀川の水系に沿って四〜五キロもさかのぼり、さらに内陸の低地帯を五〜六キロにわたって浸水したことが想定されます。この事実は、未来の房総沖地震と大津波に備えるためにも重要なことで、例えば栗山川の拡幅・直線化計画など、さらに中流域護岸の強化工事をする必要があるでしょう。

昔から「土地が災害を覚えていく」という言葉があります。これは、災害の発生する地形(条件)は決まっていることを意味するもので、過去の災害体験に学ぶことの大切さを教えています。今年の九月一日の「防災の日」は、関東大震災の六〇周年にあたります。この時にあたって、地方災害史に関する研究の一端を紹介しましたが、自然災害と生活の安全を考えるための一助ともなればと希望しております。

歴史地震の復元

房総の各地には、多くの地震史料が残されており、被害の実態をよく伝えていきます。例えば、白子町の池上家文書によると、地震の発生は旧暦十一月二十三

で正確なものを把握し、デマなどに惑わされない。(六)河口からさかのぼってくるので、栗山川沿線の住民は、海岸線の住民同様に十分な警戒体制をとる。

災害は忘れた頃にやってくる。関東大震災から六十年めにあたる今年には、周期的にも危険な時期といわれています。町も防災対策に万全を期したいと思いますが、一刻を競う事態の中でするので、自主的な防衛策がまず必要となりましょう。皆さんの地区でも、この際地震や津波の対策について真剣に話し合い、いざという時には判断を誤らせずに行動がとれるように、しっかりとした対策を定めておくことが望まれます。

防災知識をテレビから

- ▼ご存じですか
- 防災ミニ百科
- 日本テレビ(4ch)
- 八・九月の毎週木曜日
- 午前十一時五分〜三〇分
- ▼そのときあなたは?
- くらしの中の防災
- フジテレビ(8ch)
- 八・九月の毎週土曜日
- 午前九時五分〜十時